

観葉植物と老婆

もう少ししたら空は青くなくなる。あと一分ぐらい。毎日こうして空を見てぼんやりしている。たまに庭に出て植木に水をやることもあるが、大抵は部屋の中でじっとしている。部屋の隅に置いてある観葉植物と向き合う時間も長い。こまめに水をくれてやる。根が腐りはしないかと気にはかけるが、一日に二三度水をやる。成長しているのかいないのかわからない。葉を手でそつと撫でてみる。色艶がいい。根は小さな鉢に食い込んでいる。それなりに生きているのだ。

「きみはまだ若いし、職なんていくらだってあるよ。ここにいくらいても、すてきな男性は現れないよ。それには人生変えてかなきゃ、きみの将来を心配してるんだよ、ほんとに。ずっとここにいても何も変わらないんだよ」

上司の言葉は的を射ていた。本当にこのまま終わりそうな気がしていたのだ。今にも潰れそうな子会社。伝票の整理でも地道にやっていたら少なからず賃金は貰える。運が悪ければ一生同世代の男性と話をする機会などないだろう。合コンでもお見合いパーティでも積極的に出る。そんな手もあるかもしれないが、派手すぎてつい身を引いてしまう。私の喋り方、顔立ち、体つき、どこからか地味な雰囲気醸しだしているのを、私自身子供時代から気づいている。

「あなたは自分から運を逃してるね」

デパートの占い師が私の顔を見て静かに言った。鏡や家具の位置関係も教えてくれた。その通りにしてもさほど効果はないようだ。半ば諦めてはいる。観葉植物の置く位置もあれから変えてはいない。

解雇されたのは一ヶ月前。

会社にはろくろく挨拶もせず辞めた。上司は残念そうでも満足げでもなかった。いいところを探してくださいと言って頭をさげた。

私もお世話になりましたと言って、四年ほどいた会社に別れを告げた。同僚も頑張っただけと言ったきり、すぐに机の書類に目を向けてしまった。淋しさは感じなかった。別れとはこんなものかと思った。

それから何もやる気がない。空でも一日眺めているのも悪くはなかった。空が青くなくなる頃、父は会社から、母はパートから帰ってくる。

「どうしたんだ、このままじゃまずいぞ。どっか探してきたか」

「いままで何してたの？ ほら、マーちゃんが淋しがってたじゃないの。よしよし」

母は可愛がっているマルチーズのことにかこつける。犬も私が部屋にいることも知らず、留守番をしているのだ。母が帰ってくるなり小回りして飛びつき、体を小刻みに震わせている。

「マーちゃん、晴子に散歩つれてってもらいなさい、ねっ、ほら」

母が犬の尻をいくら叩いても私の方を向きはしない。私の存在を知らぬかのように振り向きもしないのだ。

「晴子、犬の散歩ぐらいしといてくれなくちゃ」

父は頭からポマードの臭いをぶんぶんさせ、怠け者とでも言いたげに皮肉を込める。私はしかたなく散歩用の紐を戸棚から出し、犬の目の前に垂らしてみる。反応はない。

「きょうはダメみたいね、マーちゃんは散歩いきたくないみたい」

「お腹すいちゃったのかしら。そうね、まあいいわ、缶詰出してくれる？」

私は台所にいったみたが、いつものところにあるはずのドッグフードがない。

「ないよ、お母さん」

「えっ、ないの。なくなっちゃったの？ ねえ、買っておいでくれなかったの、晴子」

犬は母の周りを狂ったように回っている。私は慌てて財布を取りに行く。

「いまからいくの？ いいわよ。冷蔵庫にお肉があるから」

私は啞然として犬の尻尾の振り方を見ている。犬にまで愛想つかされた気がした。

父はすぐに服を脱いで入浴の準備を始め、母はマーちゃんと一緒に台所へいってしまう。私が部屋に戻ろうとすると、父が後ろから声をかけた。

「夕食の準備しなきゃ。お母さんも疲れてるんだから」

台所ではマーちゃんは、一足早い夕食を楽しもうとしている。私は冷蔵庫から冷えたご飯を取り出す。

「それ、マーちゃんにあげるつもりじゃないでしょうね」

「えっ、ちがうよ、ピラフ作るの。簡単だから」

犬をこれほど可愛がる人もいないだろう。母は牛肉を犬にワンパックくれてしまったのだ。

暇ができると、今まで見なかったものを見るようになる。朝刊や広告を端から端まで見てしまう。芸能人の誰がどうしたとか、誰が死んだとか、いつもは決して見ることのない経済事情まで読んでしまう。それを誰かに話したくなる。よくテレビで見る中年の主婦の雑談に似ている。けれども、私には話す相手はいない。周りにいた友人は学校を卒業すると就職し、二三年もすれば結婚していった。職業安定所にいけばたくさんの人たちがうろうろしているだろう。私にはいく気もない。まだ切羽詰まったものがないのだ。

広告の片面に、『自然食品販売スタッフ募集』と大きな見出しを見つけた。私はこの広告を部屋に持っていき、半日ばかり眺めていた。とくにやりたいわけでもやりたくないわけでもない。

電話をかけると、若い女の人が出た。きれいなやさしい声である。

「募集しております。失礼ですが、おいくつでしょうか」

「二十七です」

愛想のない声で答える。

「失礼ですが……、ご結婚はされているんでしょうか」

言葉運びは丁寧であるが、こんなことを聞かれるのは初めてだ。一体販売と何の関わりがあるのだろう。少しの間黙っている。相手は気づかってか話を進める。

「それでは、面接の日時を決めたいと思いますが、えー、今日の午後はあいていらっしゃいますか？」

「はい」

「二時ごろはいかがでしょう」

「はい、じゃあ、うかがいます」

名前と電話番号を告げ、面接場所を聞いて受話器を置く。

履歴書を書くのは何年ぶりだろう。ペンに力を入れたせいか、先が潰れてしまう。大した特技も趣味もない。一応水泳と書いておく。小さい頃、母に無理やり五年間もスイミングスクールに通わされたことがある。スクールの雰囲気嫌いではあったが、少しずつ泳げるようになり、バタフライから個人メドレーまでできるようになった。それが学校の水泳の時間に活かされることはなかった。それが特技であり趣味であったのかもしれない。遠い過去のことだ。販売ということで、それ以上余計なことは書かなかった。持ち前の地味な雰囲気と趣味を合致させることがばかばかしく思えたのである。

写真はスピード写真で済ませ、面接に指定された駅前の『フレンドリーショップ』に向かった。

『フレンドリーショップ』はビルの一階にある。駅前といっても通りからはずれた人通りの少ないところにあった。開け放された店内には誰もいない。ガラスケースの中には小さな味噌樽やパックに詰められた味噌が数個置いてあるだけだ。私は一步一步中に足を踏み入れ、様子を見た。真っ白な壁にガラスケースと味噌、そして旧式のレジ。ここで販売するのだろうか。売れそうに

ない店である。味噌の値段も書かれていない。もう売ってしまったのだろうか……。

中を窺っていると、背後で車が止まった。

「ああ、面接の人ね」

四十代半ばくらいの男の人がワゴン車の窓から顔を出している。

「神谷です。二時から面接の……」

「ごくろうさま。履歴書見せてもらえます？」

車の窓から太い腕を出して急かす。私は固い文字で書かれた履歴書を渡し、黙ってその人の顔を見ている。眉は八の字を書いたように極端に垂れ、意志が弱そうに見える。目も点のように小さく強さを感じさせない。そのわりに体格がよい。声は顔に似合わず低い。

「短大出て、就職するまでブランクあるけど、どうしたの？ フリーター？」

妙に真剣な顔をしている。

「印刷会社でアルバイトをしていました」

「それで？ やめたのね」

「いえ、つぶれました」

へえと声をあげ、すかさず尋ねる。

「それで、就職先はどうしたわけ？ 先月まで勤めてたわけでしょ？」

「急に経営が悪くなって、つぶれてしまったんです」

私は嘘をついた。

「気の毒だね」

その人はぽつりと言って、履歴書の隅々まで見ている。私はそのまま突っ立ってワゴン車を見た。『あなたのためのいなか味噌』というキャッチフレーズが書かれている。だいたいのはわかってきた。これで訪問販売するのだ。

「……それでだね、いつから働ける？」

「いつからでも。ええと、明日からでも」

「そうだね、明日十時から。ううん、十五分前にここに来てください。それから、見ての通り、車でその周辺から味噌売ってきますから。それで……、うちは出来高だからね。ひとつ売って百円ってところだね。何か質問は？」

「とくにありませんが」

「じゃあ、明日から。そのときよく説明しますから。ああ、私ねえ高山と言います。よろしくお願いします」

その人はそのときばかり営業マンのように頭をさげ、車でいってしまう。面接というより立ち話のようであった。就職ではこんな具合には決してならない。アルバイトなのだからと割り切った気持ちだ。間の抜けた空気が漂っていた。

その夜、両親には面接にいったことを話さなかった。商売には品位がかけられていると思う父や母に、話をする事自体無駄だ。私自身味噌を売ることに何の期待もしていない。それなりの賃金がもらいたいわけでもない。ただ一日の退屈とあの部屋から脱出したかっただけなのである。

無添加、無着色、ノンアルコールという味噌のパックを五十個ほどワゴン車に積んだ。店長の高山さんは私にスーパーのレジ係に似た制服を着るように指示し、肩より長い髪を後ろで結ぶように言った。制服は清潔感が溢れるように白に近いグレーで統一され、パンツスタイルのものである。

「訪問販売は明るすぎず、暗すぎずにね。相手は主婦が多いから、こっちの開放的な若さなんて禁物だよ。品よく丁寧にひたむきさとか誠実さとか、まあ元気もあつたほうがいいけどね。私がやるのとたぶん勝手がちがうと思うよ、あなた、まだ若いし」

助手席に乗り込んだ私は話を聞いているうちに、手に汗をびっしょりかいた。今まで自分を飾り立てることを一番の苦手としてきた私には、訪問販売という強引な商売をやれるものだろうか。鼓動が激しく胸を打ち始める。

「今まで販売とかのアルバイトやったことある？」

高山さんは前の信号を見ている。

「ないです」

「そう。学生時代は何も？」

「はい。学校が家から遠かったものですか」

「そう……。販売には好き嫌いがあるからね。仕事だってなんでもいいわけじゃないし。私なんてね、これでも前は役所に勤めてたんだよ。けど、十年前にやめちゃったね。女房にはさんざん言われたけど、まあ、結局こういう仕事をしたかったんだよ。役所にだんだん優秀なやつが入ってきて、高卒なんて狭いところに押し込まれるような気になっちゃったんだ。そう感じてきたときは苦しくなって。今じゃあ入社拒否なんて言葉があるけど、それに近い状態になっちゃってさあ」

高山さんは苦い思いを笑い飛ばすように言う。その告白が今まで緊張で固くなった体と心を解きほぐしてくれる。

信号を折れ、車は町からどンドンと離れていく。スーパーもコンビニも見当たらない奥地へと入り込んでいく。畑や一戸建てが数多く見える。ビルやマンションの多い駅前からは想像できないほど視界が開ける。田舎道をひた走っていく。

「いつもこのへんにくるんですか？」

「うん。ローテーションでね。駅を中心として五通りぐらいあるけど、今日は東方面へね。このあたりは買い物には不便だから……」

「じゃあ、たくさん売れるわけですね」

「ううん、それはどうかな。その日によってだね」

タバコ屋の隣の空き地にワゴン車を止めると、高山さんは地図を取り出す。

「このへんを主に売ってくから」

地図を指でなぞると、すぐに車の後部から、肩からさげる発砲スチロールのクーラーボックス

のようなものを出し、味噌を詰め始める。

「神谷さん、はじめてだから、まあそこそこ愛想よくしてくれればいいから」

私は味噌の入ったボックスを肩からさげた。思ったほど重くはない。

私と高山さんは二方向に分かれ、一番手前の家に向かう。平屋で生垣の高い家の入口に立ち、玄関から庭の方を見る。誰もおらずしんとしている。白いカーテンが部屋の窓に引かれ、留守のように見える。

「フレンドリーショップです、無添加、無着色、ノンアルコールの天然味噌はいかがですか。お安くなっております」

私は高山さんの指導の通りに、大声で言う。ホーンも押したが、足音さえ響いてこない。もう一度同じことを呼びかけてみる。何の反応もない。だんだんと自分の声が小さくなっていくのを感じ、語尾が短くなってしまふ。

気を取り直して次の家に行く。玄関近くに吊るされた鳥籠の中でセキセイインコが楽しそうに囀っている。誰も出てこない。玄関で声を張り上げるだけの元気が気力とともに減退していくようだ。二軒目にして一般家庭の昼間は誰もいないことを思い知らされる。

三軒目、今度は二階建てのこのへんでは見られない豪邸に向かう。入口から庭に小さな池が見える。金魚か鯉か赤い魚が泳いでいる。

ホーンを押しいつものように言うと、しばらくして声だけが返ってくる。

「味噌ですか、間に合ってます。うちには車がありますし」

そう言って一方的に切れてしまふ。なるほどガレージに立派な車が置かれている。車でスーパーまで買い物にいけるといふことなのだろうか……。

四軒五軒と続けても、味噌を買ってくれる家はなかった。味噌というものの自体、めずらしいものではない。スーパーへいけばたくさんの種類の味噌を売っている。それもこの五百円の味噌より安くておいしいものが陳列棚に並んでいる。いくら田舎だといっても、味噌だけ買うことはありえないような気がしてくる。それに、このあたりでは味噌ぐらい自分たちで作っているかもしれない。訪問販売にはそれなりの難しさがあるようだ。私がもし逆の立場なら、買ったりはしないだろう。

その日、結局売れたのは四個だけであった。これで四百円の稼ぎになるが、一日味噌を担いで歩き回ったわりにはひどい額だ。意外と重労働であり、変動の大きい仕事だ。高山さんは十数個売れた。同じ回ってもこう違うのは不思議なものである。高山さんは顔が知られているからと言っている。それだけではないのではないか。人を寄せつける雰囲気とか口調とか、また男である点もプラスになっているのかもしれない。

帰路、私は、自転車に乗りながら前に働いていた会社の風景を思い出した。机についた社員たちはいつも時間を気にしている。あと何分で休憩時間になるか、あと何時間で退社できるのか。私もそのひとりであった。前進を望まずただ机に座り、与えられた仕事を出来るだけこなし、毎月どれだけかの給料が手元に入ってくる。ときには後輩の結婚の噂話を聞いては嫉妬し、つまらないことで意地を張り合う。平凡であり、ある意味では幸せであった。今の私自身は、何が変わったわけでもない。この仕事に何かを感じることもなく、逃げ場のひとつとなってしまったこと

は確かだ。いつでも逃げることができる。しかし、すぐにでも飛び込めるであろうデスクワークの世界に何の未練も感じていない自分を、私は黄昏の中で実感している。

家に着くと、母がソファで横になっていた。

「どうかしたの？」

「風邪ひいちゃったみたい。仕事早退してきたの。熱はないんだけどね」

「だいじょぶ？ ちゃんとふとんで寝ればいいのに」

「いいの、それよりいままでどこいったの？」

母は薄目を開け、ちらと見る。

「.....ハローワーク」

「ハローワーク？ なぁに、それ」

「職業安定所のことよ」

「ああ職安ね。それで、何か見つかったの？」

母は風邪をひいている素振りも見せずに言う。

「ううん。とくにないけど。...なかなか」

「そりゃそうよね、今仕事が見つからなくて大変なもの。世の中が不景気で騒いでいるんだものね、あるわけないわよ。こんなときに職失うなんて、タイミング悪かったわ」

「...そうね」

「まあ、そのうちにいいのが見つかるわよ、きっと」

私をなだめているのか責めているのかわからない。

私はますますかたくなに訪問販売のことを秘密にしたくなった。ひとつ間違えば押し売りと解釈されてしまいそうな訪問販売を、父や母が素直に受け入れてくれるとは思えない。親には親なりの理想があり、それが私に伝わってくるだけに辛く感じるのだ。

愛犬のマーちゃんが母に飛びついた。母は体を半分起こしながらマーちゃんをぎゅっと抱きしめ、頬を擦りつける。

「よしよし、いい子ね、さびしかったのね」

マーちゃんは母の口元をぺろぺろと舐めている。母のトレーナーには犬の毛がびっしりと張りつき、簡単にはとれそうもない。私はソファの傍らに座り込む。

「ねえ、そんなにくっついて、病気になっちゃうわよ」

母は犬を抱きしめたまま幸せそうに言う。

「なあんの病気？」

「.....狂犬病とか」

「やあだ、ちゃんと予防注射してるんだから。へんなこと言わないでよ、晴子。でも、何したって動物には罪はないのよ、そうよね、ね、マーちゃん」

私は犬が好きではない。利口な動物が好きではないのだ。とくに犬は家族のひとりひとりの位置を正確に観察している。私はこの家族のうち低いところにいて、なぜか犬より低いのである。犬は母に服従し、母は父に従い、犬は私に振り向きもしないのだ。

「ね、でも、早いうちに仕事は見つけたほうがいいわよ。医療事務の講習ぐらい受けとくといいかもしれないわね。……もう少し将来性のある学校行っておけばよかったわ」

母の言葉が胸に響く。将来のことなど心配することのないマーちゃんは、そうやっていつまでも母の傍にいればいいのだ。

「今日ね、仕事先でチョコレートもらったのよ、バッグに入ってるからとってきて食べたら？北海道にいつてきたんだって」

「チョコレート…。にきびができるからやめとく」

「高校生みたいなこと言うのね、晴子は」

母は笑ってマーちゃんを腕から離した。私はチョコレートを取りにいくふりをし、部屋にいき鍵を閉めた。

植物に話しかけるとよいと言っているのを聞いたことがある。部屋の観葉植物には、特別の変化は見られない。手持ち無沙汰も手伝って一日の出来事を話してみることにする。観葉植物の葉は一見鮮やかなように見えるが、表面は粉を吹きかけたかのように白っぽいのに気づく。小さな赤ん坊の手を取るようにやさしく葉を握る。私が言葉にした出来事の一部を、光合成にも似た循環で吸収してくれているのを感じるとることができる。

「晴子お、晴ちゃん」

間延びした母の声が近くで聞こえた。

「なあに？」

「ちょっと風邪薬もらってくるわ。やまクリニックにいつてくるから、あとよろしくね」

私は植物に語りかけるのをやめ、まず部屋の雨戸を閉めた。

味噌を販売する区域には、無愛想な主婦が多かった。

「良質な味噌を販売しております」

「だれ？」

「なに？」

勧誘か強引なセールスと勘違いしている。私も仕事をしている以上、ひるむわけにもいかない。もう一度丁寧に味噌の説明をする。

「間に合ってます」

「スーパーの味噌の方が安いんでしょ？」

「ダメダメ、いない」

そう断られるたびにこの仕事を辞めたくなる。

その日、私は五軒目の家を訪れた。

「フレンドリーショップです。無添加、無香料、ノンアルコールの味噌を販売しております」

平屋で小さな庭のある家の前には色むらのある布団が干され、玄関先に並べられた牛乳瓶には草花が飾られている。一歩さがった私は、ガラス戸から見えた人影が近づいてくるのを待ち続ける。

「ちょっと待ってくださいね。...いま、開けますから」

ごつごつとした落ち着いた声のある声。私はその声に許されるような安心感を抱き、直立して遅い動作の陰を見守る。

ようやくガラス戸がギンギンと音をたてて開き、背の低い白髪の老婆が現れる。

「.....味噌でしょ？ そうよね」

「はい。天然の味噌はいかがでしょうか」

私はいままでになく丁寧な口調で言う。

老婆はやっと私の目を見、何度も眩しげに瞬きをした。

「いただきましょ。.....あたしね、おたくの味噌を毎回買ってますのよ。でも、あなたははじめて見る顔ね」

私を招き入れる格好をする。

「いくつお買いになられますか」

肩からずり落ちたボックスを開けたときには、もう玄関から老婆の姿は見えなくなっている。

「あのう」

中を覗くと、狭い居間のテーブルの前に老婆は座り込んでいる。私は驚いて、聞く。

「お買いにはならないんですか？」

「いえ、五個ぐらいいただこうかしら。ねえ、あがってちょうだいよ、遠慮しないで」

私はボックスを肩にかけ、玄関に入る。居間と玄関の境には古い新聞が山となって積み上げられ、傍には煉瓦色の座布団が何枚も重ねられている。ボックスは玄関で開けることにし、老婆

の言う通りあがらせてもらう。老婆は重い腰つきで、黒く垢だらけのポットからお湯をひきだし、急須を満たしている。

私は慌てる。

「あのう、お茶はいただけません。私、すぐ失礼しますから」

「いいから、あがってきなさいよ。そんなこと言うとお味噌買ってあげませんよ」

老婆は私を叱りつけるように言う。

私は悪い気がしながらも居間にあがり、老婆と向い合うように座る。味噌を五パックテーブルに並べる。

「つかれてるんでしょ？ そんな目つきしてるわよ、あなた。少し休んできなさいな。あたしとお茶を一杯ぐらい飲めるでしょ」

私は販売員ということのを忘れ、はいと素直に返事をする。

昼は驚くほど擦れ、イグサがはち切れている。居間から繋がった台所には赤茶色くなったやかんや鍋が乱雑に置かれ、おわんや数少ない皿が流しの桶に漬けられているのが見える。

「さあ遠慮しないで」

老婆は湯飲み茶碗を目の前に置く。恐縮しながらもいただく。

「このお味噌、おいしいのよね。……あたしね、妹がいるからよく送ってあげてるのよ。妹もとっても喜んでるから」

一言話すたびに口元の皺が唇に集中していく。湯飲み茶碗を持つ手は色白で、細かな皺が無数に寄っている。私は何を話すでもなくお茶を啜り、かしこまって老婆の口元や皺から覗くつづらな瞳を見つめている。

「あなた、おとなしいのね。お名前は？」

「えっ、私、神谷と言います」

「神谷なにさん？」

「神谷晴子と申します」

私は天井を見た。

「そう。晴子さんというの。あたしはね、吉川たみというのよ。妹はね、たえというんだけどね……。そう、ここにはずいぶん長いこと住んでるのよ。…五十年ぐらいかしら。晴子さんの歳の半分もいってないわよね、きっと」

吉川さんは小声で笑った。

「私、お味噌の販売をさせていただいてから数日しかたっていないんです。なかなかお買いになられる方が少なく、こんなに買っていただけるのは吉川さんがはじめてです」

本当はこんなことを口にしてはいけないのかもしれない。訪問販売員として働く私は、仮面をかぶるまでの自覚さえ芽生えていない。しかし、吉川さんはますます嬉しそうな顔をし、まあと言って小声でほっほっと笑っている。

今時めずらしい柱時計がカチカチと音をたてている。私は擦りガラスから入り込む光に眠気さえ感じながら、自分がまだ生まれていない遠い昔の空間を頭の中で作り出している。

「……晴子さんは、いい娘さんね。わかるのよお、あたし」

うっとりとして私を見つめる視線に、どきっとして早口で言う。

「そろそろ失礼します。店長におこられますから。今日はお買い上げいただき、ありがとうございました」

私はこんなに親切に給料を満たしてくれた吉川さんに深々と頭をさげた。

「もういってしまうの？」

「……はい。あんまりのんびりしていらっしゃいませんから」

吉川さんの淋しそうな顔に陰がよぎる。

「ほんとにいってしまうの？」

「ええ」

「……また来てくださいねえ。今度、このお味噌、あたしの子供たちにも送ってあげたいの。八人も子供がいるのよ」

「わかりました。またうかがいます」

「きっと、きっとよ」

吉川さんは惜しそうに玄関で見送ってくれた。ボックスは軽くなり、私は元気を取り戻した。

その日のことを高山さんに話す。

「吉川さん？ 知らないなあ、ほとんどの家は知ってるんだけどね。……まあ、うちあんまりおたたくないから親しくするのも悪くないよ。ははあ、その人、神谷さんを気に入ったわけだ」

高山さんはからかうように笑う。嫌味な笑い方ではなく、あたたかな仲間意識を感じさせるものであった。

吉川さんという稀な客に出会ったせいで、その日は心地よく、私は訪問販売の階段を一段あがった気分になることができた。

夕食の準備が整った食卓で、私はその日の広告をまんべんなく見ていた。母は椅子に座ってピーナツをぽりぽりと齧り、宙を見つめている。ラジオから流れる好みではない歌謡曲が台所を巡っていく。

「ねえ、晴子」

その声には、何の感情も意志も込められていないようである。

「なに？」

ちょうど見終わった広告をテーブルの上に置き、母の顔を見る。その瞬間母は私の方を向き直る。

「晴子ちゃん、お父さん呼んできてちょうだい。部屋にいるから」

「何してるの？」

「さあ。帰ってからずっと部屋にいるのよ。これじゃあ、いつになってもごはん食べられないわよね。マーちゃんだけよ、もう満足して寝転がってるのは」

私は立ち上がり、父の部屋へ向かう。今日はめずらしく会社から帰っても入浴もせずにいるのだ。足音をたてずに部屋に近づく。ほとんど利用しない父の書斎は埃が積もっているにちがいない。

部屋に入ると、父は机についていた。それも前かがみになり、手元には何も置いていない。不審に思った私は父の背後に立ち、小声で言う。

「何してるの？」

父の体がびくんと震える。怒ったように私の目を見据え、しばらくの間黙り込んでいる。

「.....食事だって。お母さんが待ってるから」

圧迫を感じながら言う。父の孤独の姿を見てしまった私は、悪いような気がして急いで部屋を出ようとする。父の声が大きく響く。

「おい、待て」

私は振り向いて体を固くした。

「仕事、見つかったのか」

「えっ、.....まだだけど」

「いいかげんにしろ。若いくせに家でふらふらして、おもしろいか」

父は本気で言っている。見据えたままの父から目をそらし、下を向く。

「明日っから何でもいいから仕事しろ。今まで事務なんかでぬくぬくしてたのが悪かったんだ。仕事を選ぶ必要はない。何でもいいんだ」

はじめは勢いのよかった父の声は、少しずつ萎えていく。私が頭を上げると、父は顔の衰えた皮膚を撫でてふっと息を吐く。

「.....仕事、見つけるから」

私はとりあえず言う。

「……そうか。明日から俺が休みだから。これからゆっくり休むからな」

念を押すように言い、立ち上がって先に部屋を出ていく。

翌日から本当に父は家にいた。朝は長い間新聞を読み、何年も吸ったことのない煙草を口にくわえている。父は母や私を無視でもしているかのように、何も答えてくれない。自分の世界に浸り込んでいるのか、新聞の活字に夢中になっているのかわからない。

仕事を見つけると言って出ていく私に、母は耳元で囁いた。

「リストラだって。こまったわね」

母は深刻に告げたが、顔が笑っている。

高山さんの奥さんは私とちょうど一回り上であった。金魚のような赤い唇をし、アイシャドーが派手な印象を受ける。それに、よく喋る。芯の通った話し方をし、家中に響くように大声で笑う。

「神谷さんって二十代前半に見えるわね、若いわ、歳よりずっと」

私は高山さんのお宅に食事に招かれた。

「そうですか……。しずこさんもずっと若く見えます」

「やあだ。私より若い人に言われたくないわあ」

しずこさんは高らかに笑った。

「あなた、幸せよね。こんな若い子と仕事なんかしてさっ。ねっ」

しずこさんは主人を疑うように、高山さんに肩を擦りつけた。

「いやあ、まじめにやってくれるんで、助かってるんだから」

高山さんは照れもせずに答え、カキのフライをひとつ口に放り込む。

「そうですってね、えらいわあ。まだ若いのにね。こういう仕事は、主婦の貫禄がでてないとなかなかできないのよお」

「そうなんですか？」

「そうそう。さあ、食べて」

しずこさんは、ボールのように大きなガラス皿に山盛りのサラダを目の前に置いた。

さあ食べてと言うしずこさんの柔らかな声が、はじめて電話に出たときの若くてやさしい女の人の声であることがわかった。

「訪問販売ってね、すごーく元気に見せないといけないのよ。けっこう疲れる仕事よね。なかには悪い客もいるから」

「おい、そうか？ 最近はねえ、あんまり元気なのもまずいと思ってるんだよ。わざとらしいだろ。丁寧と誠実さが一番だよ」

高山さんはしずこさんに文句でも言いたげに強い口調で言う。

「そうかしらねっ」

しずこさんはレタスの巨大な固まりを口の中に一気に押し込む。

私は足にしびれを感じながら片足だけ横にずらし、好物の白菜の漬物を口に運ぶ。

吉川たみさんの家に向かう。もう四時間も歩いたが、一向に味噌の売れる様子はない。子供にも味噌を送りたいと言った吉川さんの言葉を信じ、今日の鬱屈した気分を紛らわしたいという気持ちが半分ある。

吉川さんは遅い動作で戸を開ける。袖のない赤いはんてんを着て、にっこりと笑った顔がしわくちやになる。

「よかった。待ってたのよ。毎日毎日。待ってたのよ」

こんなに歓迎してくれる人はいない。世の中にこんなに純粋に迎えてくれる人はどこにもいない気がする。

「中に入ってよ。いっしょにお茶飲みましょうよ」

遠慮なくあがらせてもらう。

「お味噌を持ってきたんです。この前、買いたいとおっしゃってましたよね」

「ええ、もちろんよ。晴子さん、おぼえてたのね。うれしいわ、買いますとも。八つよ。子供が八人いるから」

私はテーブルの横に八パック積み上げた。

「一番下の子はね、まだ十歳なの。元気いっぱい学校でサッカーばかりやってるの。クラブも入っててね、将来はサッカー選手になりたいなんて言ってるのよお」

吉川さんは自分の子供と孫を混同しているらしい。

「ちょうどあなたぐらいの子もいるのよ。会社員なんだけど、毎日机に座りっぱなしで腰傷めてるらしいの。マッサージにいったり大変らしいし。それに、一人暮らしだから心配だわ」

一言一言噛みしめるように言う。

「さびしくないですか？」

「えっ、あたし？ そうねえ、さびしいけど、しかたないわよ」

吉川さんは平気とでも言うように顔を天井に向けた。

突然、子供たちのような小さな声が頭上で聞こえた。空耳ではないかと天井の方を見ると、声は消失する。

「あなたは？」

吉川さんは声を強めた。

私はうろたえた。さびしくありません。そんな嘘が許される気がしない。今まで他人に本心を打ち明けたことなどなかった私は、なんて答えてよいのか戸惑うばかりだ。

「さびしいなんて考えないわよねえ。若いものね、晴さんは」

私が黙っていると、吉川さんは、

「それともさびしいの？」

と厳しい顔つきで尋ねる。

「いいえ、毎日楽しいです。この仕事も楽しいんです」

私は吹き飛ばすように勢いよく答えた。こうすることでしだいに人との溝は深まっていく。今まではこの連続である。意地を張るごとに淋しさは増すばかりと知っていながら、また意地を張る。それを山のように積み重ねながら……。この先も巨大な山を背負いながら生きていかねばならないのだ。

「ゆっくりやすんでいてね。こうしていると気分がなごむから」

背後で玄関の戸が開いた。

「こんにちはあ、あつ、吉川さん」

二十歳くらいの男の人がカーキ色のジャージを着て、ずかずかと入ってくる。

「何してるんですか。どうしてユメノ園の方に来てくれないんです。待ってたんですよ。どうかしたんじゃないかって、こうして見に来たんですよ」

その人はいささかむっとしている。

「まあサトくんごめんなさい、心配かけちゃって。でもね、こっちのほうが過ごしやすいから」

「こまるなあ」

彼はあきれたように言い、私の方をじろっと見る。

「吉川さん。勝手にこんな……。こんなに味噌を買おうっていうんじゃないんだろうねえ。俺だってねえ、面倒みきれないよ。こういうことされちゃあ」

彼の目は完全に私に向けられている。咄嗟に私は立ち上がり、なぜかすみませんと小声で言う。

「あなた、吉川さんのような一人暮らしのお年寄りに、一体何なんですか。失礼だなあ」

「サトくんちがうの。あたしが買うって言ったの。この人を責めないでちょうだい」

吉川さんは懸命にかばってくれる。

「あの、……私、これで失礼します。いつも買ってくださり、ありがとうございました」

「やだ、まだいかないでちょうだいよ。お願いだから。いっちゃヤダ、いやよ」

吉川さんは財布を握りしめ、中腰で前にはばかった。ズボンを乱暴に掴む。

「わかりました。俺の勘違いです、すみません。俺はユメノ園のケアワーカーの滝口サトルと言います。このへんを担当してるんです」

彼は名刺を差出した。

ユメノ園

ときわ町担当

ケアワーカー

滝口 サトル

電話:〇四五三―五三六―四六〇〇

シンプルな名刺ではあるが、彼の正体を知ることができた。吉川さんは私を異常なほど引き

とめ、いかないでと何度も言った。窓から夕陽が射し込むのを見ると、どうしてもこの家を出ねばならない。

「また来ますから」

私はもう一度天井を見る。黒ずんだ木に細かな木目が白く通っている。あの不思議な囁きはまったく聞こえない。気のせいだ。

吉川さんは疲れたのか大きな息を吐いた。

軽くなったボックスを背負い、外の空気に触れていると、ケアワーカーの彼が私の元へ走ってきた。

「さっきはすみませんでした。吉川さんはすぐ人を家の中に入れてから心配なんです。こう言うと失礼なんですけど、あなたは信頼できそうなので、たまに見に来てはもらえませんか。とにかく体が弱ってるし、吉川さん一人では何かと心配なんです。本当はケアハウスの方に来てもらいたいんですけどね。頑固だからなあ」

彼は八重歯を出して笑った。暗い家の中で見た威圧的な印象はなく、肌の色も白く、黒目の大きい青年である。彼の存在は、ケアワーカーという仕事に正義を感じさせる。私は新鮮さとともに今までの生活に彩りを与えるかのような、心に小さな芽生えが急速に成長していくのを知られた。

「……あのう、ケアハウスにはお年寄りが多いんですか？」

「うん、ほとんど。たまに若い人もいるけど、…いろいろかな」

「……仕事、大変ですか？」

どうにか話を続けたく、どうでもいい質問をする。

「まあ、でも楽しいですよ。あの吉川さんみたいな人がいると、楽しいんです。少しはわがままにふるまってもらえると。……元気な証拠だから」

彼はまた八重歯を剥き出しにして笑った。

「そのケアハウスってどのへんにあるんです？」

「えっ、あの山の上の方ですよ」

彼が指差した山の方を見たが、建物までは見るできない。山の頂辺りなのだろう。

「それで、あの……」

私が言葉を詰まらせていると、クラクションが横で鳴った。彼が乗ってきた車の後ろから、大きなダンプカーが通ろうとしている。

「あ、いけねえ、それじゃあ失礼します」

軽く頭をさげて彼は走って行ってしまった。

私は彼の車を最後まで見守っていた。こんなに切ない気分を味わったのは何年ぶりだろう……

その日の空は青くなかった。冷たいくらい冴えているが、私には青という印象を持つことができない。青という文字を使うのなら、黒みがかかった青に限りなく近い。果てしない宇宙の入口に、薄れていく空気の陰影が私には見えるのだ。軽く傷みのある右肩や地についた私の足、今日会

うことのできた彼の存在は、空を見れば非常に小さい。秘めた巨大なエネルギーは空を覆うほど広く、強く感じられる。

後ろを振り向くと、通りには誰もいない。吉川さんの家も静まり返り、中に誰かいるようには思えなかった。風の音も気味が悪いほど聞こえてはこない。現実を思わせる何かがここにはないような気がした。

高山さんは今日の売上を喜んでくれた。褒められるのは何年ぶりだろう。また、明日もこれで続けられるにちがいない。

父は家から一步も出る様子はない。窓の外を眺めていることもある。鳥の囀りが聞こえようと、窓を開けたりはしない。

昼間はどのようにしているのかわからない。部屋に閉じこもっているのか。机について下を向いているのか。空を眺めているのか。

母は毎日職業安定所を行き来している。現実を受けとめているようだ。

ふと母の顔を見ると、目が充血している。

「目が赤いよ、目薬つけたら？」

「どうってことないわ」

母は乱暴に掌で目を擦る。

「……晴子」

「えっ」

「あなた、何かやってるんでしょ」

「…うん。やってるけど」

「何を？」

「販売。……訪問販売」

「何の？」

「味噌。味噌売ってるの」

「……そう」

虚ろな返事である。

父は毎朝居間のソファに座り続けている。新聞や戸棚の植物図鑑を眺めたり、ときには大きな欠伸が部屋中に響いている。母も何も言わなくなった。私も、父に話しかけなくなる。

出がけにマーちゃんが私の周りをくるくると回る。

「よしよし、マーちゃんはかわいいね」

私は母のように犬の頭をやさしく撫でる。よく見ると、犬の顔はかわいいものである。舌を出した犬の目と合ったとき、はじめてそう思う。

玄関の戸を閉めるとき、父の大きな溜息が聞こえた。封印するように素早く戸を閉める。戸は重く、ガチャリと音をたてて下界との境を確実に作った。

どんよりとした空は、一面に湿気を帯びた生温かい空気に包まれ、かすかに土のにおいがする。コンクリートの地面から放射する熱が、足元に染み込んでくるのを感じる。鳥の声がどこかでせわしげに鳴いている。広大なあの地へ向かっていく自分を想像する。

制服を着て車に乗り込もうとすると、しずこさんの声が追いかけてくる。

「神谷さん、あの吉川さんっておばあちゃんにこれ渡してくれる？ 石鹸なんだけど、いつもたくさん買ってきてくれて悪いから」

ピンク色の包装紙に包まれた四角い箱を受けとり、ボックスに入れる。

「じゃあ、いってくるよ」

高山さんはすぐに車を発進させた。笑顔で手を振っているしずこさんの姿が遠ざかる。

高山さんはラジオのボリュームをさげ、右手だけをハンドルに置く。

「毎日歩いてばかりで疲れないかね」

「なんだか体力がついたみたい」

「そうか。でも、無理しないで休みたいときは休んでいいから」

私の頭の中には、吉川さん宅で出会ったケアワーカーの姿が居座っている。もしかして、運がよければ……。想像力は、靄のように膨れ上がる。不安と期待が交じり合う。

高山さんと分かると、私はすぐに吉川さんの家に向かった。平凡な街並みや、そこに住んでいる人々が不思議なほど新鮮でやさしげに思える。心の柔らかな襞がいつの間にか広がり、人々に対する警戒心や恐れが慈しみに変わっていく。それは、想像できるすべての自分を許せることに似ている。

吉川さんの家の前に着いた私は、愕然として立ちすくんだ。夢でも見ているのだろうか。あるべきところに家がないのだ。目の前はきれいに整地され、物干竿のかけらも落ちていない。手前に何本かの雑草が生えているものの、整地された土くれ以外には何もない。

「どうかしたんですか？」

呆然としていると、誰かの声がした。

横に、白いユリの花束を抱えた中年の女性が立っている。ユリの白さに目を奪われ、口を半ば開けようとした瞬間、その人は私から目をそらした。

「一ヶ月前、ここで女の子が亡くなったの。オートバイでね。夜中、電柱にぶつかったらしいの。大きな音がして……。救急車呼んだんだけど、遅かったのよ。二十歳前の子でね、なんだかかわいそうで」

その人は花束を事故の遭った電柱の下に置いた。

「それで、あの、ここにあった家は怎么样了ですか？」

私の鼓動はおさえようもなく高まっている。

「ああ、昨日取り壊されたの。もともと空き家だったし、古い家だったからきれいに片づいてよかったわ」

「ここに住んでいた吉川たみさんはどうしたんですか？」

「吉川たみ？」

怪訝な目を私に向ける。

「吉川たみは私よ。なんであなた知ってるの？」

「えっ……、だって私」

その人は私のことなど知らぬ様子で、電柱に向かって手を合わせる。

事実ともつかない現実を整理できないまま、私は元来た道を引き返す。

吉川たみを名乗る女、路上でサッカーをしている少年たち……。あの味噌を買ってくれた吉川さんはどこへ行ってしまったのだろう。あの人懐っこく親切にしてくれた老婆、事故で亡くなった少女、それに悲しみを寄せる近所の中年の女。皆、何の接点もない人達なのか……。

現実はどうなのだろう。それを確かめたくて私は電話ボックスを探した。

滝口サトルの電話のダイヤルボタンを押そうとした瞬間、心と頭上に何かの気配を感じ、私は空を仰いだ。

上空に靄が立ちこめている。先端を見ると、吉川さんの家の方へ流れている。微風が吹いているのだ。私は電話ボックスの扉に手をかけ、流れきろうとする靄を見つめる。

どんよりとした雲の狭間から、かすかな青が覗く。風をきろうとする一羽の小鳥が羽ばたいていく。どこへいくのだろう……。私は視界から途切れるまで追いつけた。歩きだそうとする私の肩の傷みは消え、両足は重く、地面を強く踏みしめていた。

了